

| | |
|---------------|---|
| Title | ミラノ方言の音韻研究(その1) : 母音 |
| Author(s) | 藤村, 昌昭 |
| Citation | 大阪外国語大学学報. 42 p.15-p.28 |
| Issue Date | 1978-03-15 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/80709 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ミラノ方言の音韻研究（その 1）

— 母 音 —

藤 村 昌 昭

Nozioni fonologiche intorno al dialetto milanese

Parte I : Vocalismo

Masaaki Fujimura

Prefazione

《*Quapropter si primas et secundarias et subsecundarias vulgaris Italiae variationes calculare velimus, et in hoc minimo mundi angulo non solum ad millenam loquele variationem venire contigerit, sed etiam ad magis ultra*》 scrisse Dante nella sua 《*De vulgari eloquentia*》 ed effettivamente questa ricchezza dell'Italia dialettale, proprio per quale il poeta ebbe cagione e motivo di esaminare, classificare e giudicare dei vari dialetti sul loro valore poetico ed artistico, ci offre l'ottima occasione fra le nazioni europee con tanti documenti indispensabili per seguire una giusta vicenda storica delle lingue neolatine, sia riguardo alla sua quantità sia alla sua qualità.

Fino ad oggi giorno, la città di Milano, il cui nome deriva dal 《*mediolanum*》 (piano di mezzo), gode, in fatti, il privilegio di essere un nucleo in senso politico-economico dell'Italia settentrionale. L'analisi e l'assetto del milanese nella penisola dialettale di cui si tratta specialmente dal punto di vista fonologica, cercheranno di tener conto di consultare anche il dialetto *brianzolo* come un suddialetto del milanese che rivela dei tipi antichi della lingua milanese, combinando per quanto possibile il metodo sincronico con quello diacronico.

Agosto. 1977.

はじめに

《イタリア、こんな世界の片隅でも、その方言の種類は優に千を数える》と、ダンテは『俗語論』（“*De vulgari eloquentia*”）のなかで述べているが、その言葉通り、イタリアに現存する方言の種類は千差万別で、ラテン語からロマンス語への変遷過程を知る上では不可欠ともいえる貴重な生きた資料を提供している。なかでも、北イタリアのロンバルディアは、ピエモンテと共にケルト基層の研究対象として重視され、長年に渡る活発な論争の的となってきた。また、標準語（国語）問題に関しては、常に、フィレンツェを中心とするトスカーナ方言（いわゆる現代イタリア語の母体）

の好敵手としての地位を固持し、その標準語に与えた影響も大きい。さらに、現在の政治・経済におけるローマ＝ミラノという両軸を考慮すれば、将来の新しいイタリア語に対して、ロンバルディア方言が重要な役割を演じるであろうことは疑えない。ここではロンバルディア、延いては北イタリアの中枢ともいえるミラノの方言を中心に、特に音韻面に重点を置いて、トスカーナ方言を母体とした標準語との比較・分析を試み、《方言半島》のなかにミラノ方言を明確に位置づけてみたい。また、古い文献・資料を可能な限り導入して、共時・通時の両面からのアプローチに努めたが、それと平行して、ミラノ北部のブリアンツァ方言を重視したのは、この地方の言葉が、ミラノ方言の古語・俗語の類を数多く保存しているからである。それに、一年余りの現地滞在で得た体験と、長年ブリアンツァに住み、ミラノ市の商業銀行に勤務する畏友ヴィンチェンツォ・マッラーニの貴重な助言のあったことも銘記しなければならない。この小論を試みる最大の動機となったのは、現地で受けた強烈な音韻的第一印象であり、そのなかに、標準語にはない何か人間臭い響きと、一種の郷愁に似たものを感じるの、個人的な感傷に過ぎないかもしれないが、その印象が鮮明な間に、少しでも記録に残しておきたかったのである。

I. 母音の交替

古典ラテン語から俗ラテン語への母音の変遷過程で、最も基本的なものは次に示したものであるが、この母音体系に従って、ミラノ方言と標準イタリア語（トスカーナ方言）における母音の交替を比較・検討してみる。

| | | | | | | | | |
|--------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 古典ラテン語 | i | ĩ | ē | ě | ǣ | ō | ū | ũ |
| 俗ラテン語 | i | e | e | e | a | o | u | u |

(1). 古今東西を問わず、母音の交替の花形は $e : i$ であり、ラテン語もその例外ではない。 $i > e$ の変化は、すでに紀元三世紀以前のラテン語の碑文に確認されている（例：*menus*, *fede*, *accepere*, *demediam* etc.⁽¹⁾）もので、イタリア語においても、 $ĩ, ē > e$ の傾向は強く現われている。例：*tela*, *sera*, *moneta*, *vena*, *cera*, *pera*, *nero*, *pelo*, *neve*, *mese*, *paese*, *vede*, *fede*, *spesso*, *seta*, etc. これに対して、ロンバルディアでは、この強勢の e が強調されて i に発展する傾向が強い。ミラノ方言の場合、都心部においては e と i の間に動揺が見られるものの、周辺部や俗語には i が保存されている（例：*tila*, *sira*, *zila* ‘*cera*’⁽²⁾, *candila*, etc.）。また、ミラノ方言では標準語の e が定着しているものでも、まえがきで触れたブリアンツァ地方では i が根強く残っていることから、かつてはミラノ方言にも i が大きな勢力であったという推察が可能となる。

| | | | | | |
|----------|------|--------|--------|--------|---------------------|
| ブリアンツァ方言 | fida | nigher | spiss | nibbia | ticc ⁽⁴⁾ |
| ミラノ方言 | fed | negher | spess | nebbia | tecc |
| 標準イタリア語 | fede | nero | spesso | nebbia | tetto |

ロンバルディアにあっては特異な言語体系を示すベルガモ方言にも、*sida* ‘seta’, *bif* ‘bere’, *nif* ‘neve’, *pil* ‘pelo’, *munida* ‘moneta’, *mis* ‘mese’, *Birghem* ‘Bergamo’, etc. と数多くの例が確認できるし、イストリア地方にも、共通の例 (*munida*, *mis*, *sida*, *nigro*, *pil*, *sira*) が見い出せる。⁽⁵⁾ ここで問題となるのは、これと同じ現象が、イタリア半島の先端部 (例 : *sita*, *candila*, *nigru*, *catina*, *sira*, *nivi*) と、シチリア (例 : *tila*, *nivi*, *pilu*, *tri*, *lignu*, *misi*) に限って確認されていることである。⁽⁶⁾ 両者を結び付けることは容易であるが、視覚的な同じ結果よりも、各々の変遷の歴史を慎重に検討することが必要である。長年に渡る研究の結果、シチリアの場合は、標準イタリア語におけるロマンス語に共通の母音変化 (*ĩ*, *ē*, *ě* > *e*) とは異った独自の変化、つまり、*ĩ*, *ĩ*, *ē* > *i* によって説明されている。それに対して、ロンバルディアに見られる現象は、*ĩ*, *ē*, *ě* > *e* > *ei* > *i* という発展によって説明され、中間的音韻 (*ei*) の実例としては、ピエモンテやリグリアの中世の記録 (例 : *meis*, *peina*, *veira*, *ceira*, *peigro*, *neigro*, *savei*, etc.) と同時に、現代のピエモンテ方言 (例 : *candeila*, *peis* ‘pece’, *steila* ‘stella’, *neir* ‘nero’, *peir* ‘pero’, *muneida*, *teila*, *meis*) やリグリア方言 (例 : *kandeila*, *peize*, *neigru*, *neive*, *meise*) が提示される。

しかし、この点に関しては、後で問題にすることでもあるが、ミラノ方言が極端に二重母音を拒否する傾向が強いことからして、ミラノ方言では、*e* > *ei* > *i* よりも *e* > *i* の可能性の方が大きいといえる。さらに、この *e* > *i* に関連することとして、形態論からの説明を付記する必要がある。ミラノ方言を例にとるならば、それは、語尾切断と重要な関係がある。ミラノ方言では、名詞の場合、語尾の *-a* は保たれるものの、*-o* と *-e* は、男性、女性名詞に関係なく脱落する (例 : *man* < *mano*, *calss* < *classe*, *animal* < *animale*)。このために、名詞は単複同形のものが多くなり、男性形と女性形の区別が困難になってくる。その混乱を解消するものは、主に不定冠詞と定冠詞であるが、ミラノ方言では、指示代名詞や数形容詞にもその役割を与えようとする努力が見られる。

(例) *tre donn e tri omen* ‘tre donne e tre uomini’
quest (quell) e quist (quii) ‘questo (quello) e questi (quelli)’

(2). *i*, *ē*, *ě* > *e* の例外的要素として、標準イタリア語 (トスカーナ方言) では、強勢の前の語頭において、この *e* が *i* に変化するのが普通である。例 : *migliore*, *signore*, *misura*, *sicuro*, *finestra*, *minestra*, *nipote*, *minore*, *virtù*, *prigione*, *vicino*, *finire*, *bisogno*, *finocchio*, *pidocchio*, *ginocchio*, *Milano*, etc. ミラノ方言にもこの影響が強く見られるが、*e* を保存したものも数多く確認できる (例 : *fenestra*, *menestra*, *mesura*, *preson* ‘prigione’, *nevod* ‘nipote’, *besogn* ‘bisogno’, *vesin* ‘vicino’, *desember* ‘dicembre’, *menuder* ‘minuto’, *menom* ‘minimo’, *zenever* ‘ginepro’, *fenocc* ‘finocchio’, *genocc* ‘ginocchio’, *pedocc* ‘pidocchio’ etc.) この点に関して、ダンテの場合、『神曲』のなかで *fenestra* (*Inf.* XIII, 102) を使用している他、*diserto*, *Litania*, *Mincio*, *nipote*, *prigione*, *signore*, *timone*, *virtù* と同時に、*deserto*, *Letania*, *Mencio*, *nepote*, *pregione*, *segnore*, *temone*, *vertù* も併用している。これに対して、ペトラルカの場合は、『カンツォニエー

レ』のなかで、*signor, migliore* を使用する一方、*vertù, fenestra, pregione, sicura* も登場させている。それでは、トスカーナの影響を強く受けていたローマではどうであろうか。14世紀のローマ方言で書かれた『コーラ・ディ・リエンツォの生涯』⁽⁸⁾には、*signore* は確認できるものの、*nepote, sicuro, migliore, fenestra, fermare* ‘firmare’, *fegura, etc.* と数多くの *e* の例が見られる。以上のことから、この強勢の前の語頭における *e > i* の変化は、トスカーナを起源としてイタリア全土に広く流布したことが理解されるが、同時に、ルネサンス初期の段階では、トスカーナにおいてさえも、まだ不安定な状態にあったといえるだろう。

ラテン語の接頭辞 *re-*, *de-* が、標準語において *ri-*, *di-* に変化したことも、ほぼこれと同じ発展と考えられる。ミラノ方言では、*re-* : *ri-*, *de-* : *di-* が共存しているが、慣用的なものには *re-*, *de-* が固持されている（例：*redoss* ‘ridosso’, *refud* ‘rifiuto’, *reussì* ‘riuscire’, *debon* ‘di buono’, *degìà* ‘di già’, *denanzi* ‘dinanzi’, *desora* ‘di sopra’, *destend* ‘distendere’, *etc.*）。ダンテの場合は *re-*, *de-* と *ri-*, *di-* の併用が目立つ（前者の例：*redurre, riflettere, refratto, refugio, refulgere, relucere, rimuovere, ripetere, riservare, risolvere, resurgere, rivelare, revestire, difetto, dipendere, dispetto, etc.*）が、ペトラルカの場合は、ほぼ現代イタリア語の用法に近い安定性を見せている（例外：*refugio, rilevare, dipinto, disperare, destringere*）。また前述の『伝記』においては、*re-*, *de-* を保存する傾向が顕著に現われている（例：*de, destenne* ‘distende’, *denanti* ‘dinanzi’, *descordia, retenere, responnere* ‘rispondere’, *recepere* ‘ricevere’, *etc.*）

最後に、これは音韻面には直接関係のないことであるが、ミラノ方言では、接頭辞を伴った動詞を避けて、いわゆる迂回的表現（というよりは、解説的表現といった方が正確かもしれない）を好む傾向が強いことを付記しておきたい。このことは、トスカーナにおける文語（紙上の言葉）の発達と対照的に、ロンバルディアにおける口語（口上の言葉）の発達を意味しているといえるだろう。以下、*de-* と *re-* に限って二、三の例を示してみた。

deprezzare : *fà dimenui el prezzì* ‘fare diminuire il prezzo’
digradare : *sbassass a pocch a pocch* ‘abbassarsi a poco a poco’
diricciare : *tirà fòra i castegn di risc* ‘tirare fuori i ricci delle castagne’
riconciare : *fà fà la pas* ‘far fare la pace’
ridire : *tornà a dì* ‘tornare a dire’
riunire : *mett insem* ‘mettere insieme’

(3). (2)と同様に、これも *ĩ, ē, ẽ > e* に対する例外的な要素であるが、語尾から三音節目に強勢がある（*proparossitono*）場合、標準語においては、その次の *i* は保たれている（例：*mèrito, sólido, politico, mūsica, ànima, vèrgine, nòbile, òrdine, mànico, gòmito, àsino, etc.*）。これに対して、ミラノ方言では、特に俗語や周辺部において、*i > e* の現象が顕著に現われる。例：*abet* ‘àbito’,

ànema, *asen* ‘àsino’, *dudes* ‘dòdici’, *fèmena*, *gioven* ‘giòvine’, *lares* ‘làrice’, *manegh* ‘mànico’, *musegh* ‘mùsica’, *nobel* ‘nòbile’, *omen* ‘uòmini’, *orden* ‘òrdine’, *termen* ‘tèrmine’, *teved* ‘tèpido’, etc. この変化は、トスカーナの一部にも確認できるもので、アレツツオでは、*femena*, *termene*, *ordene*, *nobele* が普通であり、またウンブリアでも、*utele* ‘ùtile’, *giovene*, *simele* ‘sìmile’ といった共通の変化が見い出せる。

これと関連して、ミラノ方言では語尾から三音節目に強勢がある場合、その次の母音に関しては $a > e$ の変化も認められる。例：*cofen* ‘còfano’, *disper* ‘dìspari’, *fidegh* ‘fègato’, *lampa* ‘lāmpada’, *manghen* ‘māngano’, *orfen* ‘òrfano’, *orghen* ‘òrgano’, *monega* ‘mōnaca’, *indech* ‘indaco’, *sindech* ‘sindaco’, *sigher* ‘sìgato’, *sabet* ‘sàbato’, *stomech* ‘stōmaco’, etc.

これら二つの現象を総合すると、ミラノ方言においては、語尾から三音節目の強勢母音の次の母音 *i*, *a* は、共に中間的な *e* に移行する、という法則が成立する。

(4). これも、 $i, \bar{e}, \bar{e} > e$ の例外と考えられるものだが、標準イタリア語において、 $[ŋ]$, $[ɲ]$, $[ʎ]$ ⁽¹⁰⁾ の前では $e > i$ の変化が普通である。例：*vincere*, *lingua*, *tinca*, *tigna*, *tingere*, *figgere*, *cingere*, *pingere*, *spingere*, *gramigna*, *famiglia*, *miglio*, *consiglio*, *tiglio*, *ciglio*, etc. これに対して、ミラノ方言では、(2)や(3)の場合と同様に、*e* を保つ傾向が強く現われる（例：*lengua*, *fameia* ‘famiglia’, *tegna*,⁽¹¹⁾ *tei* ‘tiglio’, *mei* ‘miglio’, *tenca*, *gremegna*, *streng* ‘stringere’, *tegnōra* ‘tignola’, *consei* ‘consiglio’, *veng* ‘vincere’, *teng* ‘tingere’, etc.）。これはミラノ方言だけではなく、フィレンツェを除いたトスカーナにも同じ例が確認できる。アレツツオでは、*lengua*, *vento* ‘vinto’, *gramegna*, *meglio* ‘miglio’, が、また、トスカーナ南部では、*lengua*, *tenca*, *ramengo*, *gramegna*, *teglia*, *ceglia* ‘ciglio’, が普通であり、シエナでは古語として、*conseglio*, *vence*, *fameglia*, *gramegna*, *benegno* ‘benigno’ が確認され、カンパーニャのナポリでさえも、*lengua*, *fegnere* ‘figgere’, *teglia*, *streglia* といった例を提供している。⁽¹²⁾ しかし、ダンテやペトラルカには、すでに *i* の方が絶対的な勢力を誇っているし、ダンテの場合には、*Sardigna* (*Inf.* XXII, 89 ; *Inf.* XXIX, 48) や *Corniglia* (*Inf.* IV, 128 ; *Par.* XV, 129) にまで *i* が適用されているほどである。その上、例のローマ方言による14世紀の『伝記』のなかにも、*conziglio* ‘consiglio’, *resbigliato* ‘risvegliato’, *Marziglia* ‘Marsiglia’, *familia* ‘famiglia’ が確認される他、*miglio* と *meglio* が区別して使用されている。これらの点を考慮すると、 $[ŋ]$, $[ɲ]$, $[ʎ]$ の前における $e > i$ の変化は、(2)の場合と同様に、フィレンツェを起源とする勢力で、ルネサンス初期には、すでに安定した力を保持し、その影響は特にラツィオ（ローマ）に対して顕著であったという推察が可能となる。そして、標準語における例外的要素（例：*meglio*, *legno*, *detto*, *venti*, *spengere*, *segno*, *pegno*）は、同音語・類音語（例：*miglio*, *lino*, *dito*, *vinti*, *spingere*, *sino* ; *Signa*,⁽¹³⁾ *pigna* ; *pino*）との混乱を回避するためのもので、フィレンツェを中心とした文語の発達と何らかの関係があるのではないかと考えられる。

(5). 前舌母音の ĩ , ē , $\text{e} > \text{e}$ の変化に対応するものとして、後舌母音には ũ , ō , $\text{ö} > \text{o}$ の変化が起こる。この点に関しては、(1)の場合と同様に、標準イタリア語では、*voce*, *noce*, *croce*, *coda*, *sole*, *corona*, *scopa*, *ora*, *loro*, *rosso*, *molto*, *torre*, *forma*, *forno*, *mosca*, *vergogna*, *piombo*, *forse*, *noi*, etc. と安定しているが、北イタリアでは、この強勢の o が u に発展する傾向が見られる。ミラノ方言の場合、正書法の面から見れば慣習として o を宛っているものの、発音上は標準語の u と同じものがある。(例: *vos* ‘voce’, *nos* ‘noce’, *spos* ‘sposo’, *cros* ‘croce’, *coa* ‘coda’, *tor* ‘torre’, *sol* ‘sole’, *famos* ‘famoso’, etc.)。従って、ミラノ方言において o で表記された母音には、標準語における三種類の発音 ($[\text{ɔ}]$, $[\text{o}]$, $[\text{u}]$) が包含されている点に注意する必要がある。

(例) *sor* $[\text{sɔr}]$ ‘soro’, *sorà* $[\text{sora:}]$ ‘sorare’, *sora* $[\text{sura}]$ ‘sopra’

これと関連して、ミラノ方言における u の表記 (本稿では慣例的な ü を適用した) は、フランス語の *culte* や *duc* における $[\text{y}]$ の発音に近いことも付記しておかなければならない。この点に関して、上記の $\text{o} [\text{u}]$ が次に i を伴うような場合、ミラノ方言では $\text{o} [\text{u}] > \text{ü} [\text{y}]$ の変化が顕著である⁽¹⁴⁾

(例: *nün* ‘noi’, *vü* ‘voi’, *püi* ‘polli’, *büi* ‘bollire’, *rüinà* ‘rovinare’, *sürbì* ‘sorbire’, etc.)。しかし、ミラノ方言における $\text{o} > \text{u} > \text{ü}$ の変化は、これ以外にも数多く確認される (例: *cürt* ‘cor-to’, *cüntà* ‘contare’, *cügnaa* ‘cognata’, *püstemma* ‘postema’, *trütta* ‘trota’, etc.)⁽¹⁵⁾。 $\text{o} > \text{ü}$ の中間的存在と考えられる ö (ミラノ方言では普通 œu と表記される) の例も顕著に見い出せる。例: *bröd* ‘brodo’, *cröi* ‘croio’, *döia* ‘doglia’, *föi* ‘foglio’, *göbb* ‘gobbo’, *löi* ‘loglio’, *mödo* ‘modo’, *möla* ‘mola’, *nöd* ‘nodo’, *nöf* ‘nove’, *piöf* ‘piovere’, *pröva* ‘prova’, *pö* ‘poi’, *rösa* ‘rosa’, *tö* ‘togliere’, *vöia* ‘voglia’, etc. この音韻変化については、 $\text{uo} > \text{ö}$ や $\text{u} > \text{ü}$ と関連づけてさらに検討を加えるとして、ここでは、(1)で触れた $\text{e} > \text{ei} > \text{i}$ と対応させて、 $\text{o} > \text{ou} > \text{u}$ という発展が指摘されていることを確認しておくことにする。この二重母音が現存するのは、エミリア・ロマーニャとトスカーナの北西部であり、例えば、ボローニャでは、*duttour* ‘dottore’, *dulour* ‘dolore’, *vous* ‘voce’, *our* ‘ore’, *soul* ‘solo’ が確認され、アドリア海側のサン・マリノでも、*couda* ‘coda’, *padroun* ‘padrone’, *vousa* ‘voce’, *aloura* ‘allora’, *lioun* ‘leone’, *ancoura* ‘ancora’, *amour* ‘amore’ が、そして、エミリア・ロマーニャと接するトスカーナの北西部では、*skoupa* ‘scopa’, *nəpouto* ‘nipote’, *soulo* ‘solo’, *nouga* ‘noce’, *goulpa* ‘golpe’, *toura* ‘torre’, *poumə* ‘pomo’, *moundə* ‘mondo’, *foungə* ‘fungo’⁽¹⁶⁾ といったぐあいである。しかし、非常に限られた範囲に保たれていることから、(1)における二重母音 ei ほどの勢力はなかったと考えられる。

最後に、(1)の場合と同様に、この $\text{o} > \text{u}$ の変化は、イタリア半島の先端部 (例: *nuci*, *ura*, *jugu* ‘gioco’, *turri* ‘torre’, *musca*, *niputi* ‘nipote’) や、シチリア (例: *cuda*, *vuci*, *nui*, *vui*, *cruci*, *stuppa*, *furnu*)⁽¹⁷⁾ でも現われているが、これは、 i , ĩ , $\text{ē} > \text{i}$ に対応するシチリア独自の母音体系 (ü , ũ , $\text{ō} > \text{u}$) によって説明され、ダンテの詩に登場する $\text{o} > \text{u}$ の適用 (例: *nui*, *vui*, *pui*, *nuiā*) に関しても、北イタリアの影響ではなくて、シチリア学派を媒介としたものと考えてのが妥当であ

ろう。

(6). (2)と対応する現象として、標準イタリア語では、強勢の前の語頭において、 \ddot{u} , \ddot{o} , $\ddot{ö}$ $>$ o の o が u に変化するが、強勢の i が後続する場合には特に顕著である（例：*cucire*, *fucile*, *ubbidire*, *uccidere*, *cucina*, *mulino*, *cugino*, *pulire*, *cuscinio*, *ufficio*, etc.）。他にも、*budello*, *bulletta*, *frumento*, *puledro*, *uccello*, *rumore*, *rugiada*, と、 u を好む傾向が強い。これに対して、ミラノ方言では、強勢の o が $o > u > \ddot{u}$ と発展したのとは逆に、強勢の前では o を固持している。

例：*obidi* ‘*uddidire*’, *offizi* ‘*ufficio*’, *cossin* ‘*cuscinio*’, *poli* ‘*pulire*’, *bodin* ‘*budino*’, *bolin* ‘*bulino*’, *bosard* ‘*bugiardo*’, *poleder* ‘*puledro*’, *rosada* ‘*rugiada*’, etc. この $o : u$ に関しては、現代イタリア語のなかにおいても共存が見られる（例：*bolletta* : *bulletta*, *bollone* : *bullone*, *orina* : *urina*, *olivo* : *ulivo*, *molino* : *mulino*, etc.）もので、後者がトスカーナ型であることは疑えないとしても、ダンテの『神曲』においては併用が目立つ（前者の例：*obbedire*, *ufficio*, *ombelico*, *omore*, *romore*, *ronciglio*, *Corrado*, etc.）と同時に、*olivo*, *mulino* は確認されず、常に *ulivo*, *molino* が登場している。また、前述のローマ方言による14世紀の『伝記』においても、まだ o を保つ傾向が強いようだ（例：*oliva*, *odire* ‘*udire*’, *obedire*, *occidere* ‘*uccidere*’, *romore*, etc.）。こうして見ると、強勢の前の語頭における $o > u$ の勢力は、ほぼ(2)と同次元でイタリア全土に波及したものであると考えられる。

(2)において、ラテン語の接頭辞 *de-*, *re-* の変化を問題にしたが、ここでは *sub(s)-* $>$ *su-*, *so-* を検討してみたい。ダンテの『神曲』では、現代イタリア語に定着している *soggetto*, *sorgere*, *sostanza* と共に、*suggetto*, *surgere*, *sustanza* が確認される。この場合、後者がフレンツェを中心としたトスカーナで好まれた型であることは容易に推察できる。ミラノ方言の場合、音韻的な変化（ $u > \ddot{u}$ ）は別として、表記だけを問題にすれば、ほぼ標準イタリア語と同じ発展を示しているが、(2)の場合にも触れたように、ミラノ方言では迂回的表現（解説的表現）を好む傾向が強く、接頭辞 *sub(s)-* の代りに、副詞による補足説明で充たされる場合が多い。

- (例) *sussultare* : *saltà via* ‘*saltare via*’
 sussidiare : *dà on sussidi* ‘*dare un sussidio*’
 socchuiudere : *sarà metaa* ‘*serrare metà*’
 sogguardare : *guardà de sott* ‘*guardare di sotto*’
 sommergere : *andà sott* ‘*andare sotto*’
 sorreggere : *teguì su* ‘*tenere su*’

(7). これまで、(1)と(5)、(2)と(6)を対応、つまり、前舌母音（ i , e ）と後舌母音（ u , o ）を対応させて母音の交替を比較、検討してきたが、今度は、(3)で見られた語尾から三音節目に強勢が落ちる場合の法則が、後舌母音にも適用可能かどうかという問題である。(3)の場合、強勢の次の母音

において、標準語 *i* : ミラノ方言 *e* の対立が顕著であった。しかし、後舌母音に関しては、標準語、ミラノ方言ともに、*ũ, õ, ö > o* は安定した強みを示している。例：*ângolo, âtomo, câcola, círculo, cûpola, discêpolo, edicola, equívoco, Fiêsole, Nâpoli, mirâcolo, ostâcolo, pòpolo, penìsola, ridicolo, stîmolo, vèdovo, vocàbolo, etc.* このことは、ラテン語の縮小辞 *-ŭlus(a)* が、イタリア語では *-olo(a)* として定着し、数多くの造語を製産していることから容易に理解される。現代イタリア語には、例外的に、*cumolo, tumolo* に対して *cumulo, tumulo* が共存しているが、その他で強勢の次に *u* を保っているものといえば、一般民衆の生活とは馴みの薄い、いわゆる術語 (*nomenclatura*) の類であり、この場合は、ラテン語音 (*ũ*) を固持しようとする意識の表われと考えることができる。例：*âlluce (big toe), campânula, cànula, càpsula (capsule), còpula, glòbulo, (globule), lòculo (loculus), lùnula, mòdulo (module), prònubo (paranymph), sùccubo (succubus), etc.*

それでは、(3)の場合には *e > i* が容易に受け入れられたのに対して、*o > u* が拒否された原因は何であったのだろうか。(6)では、強勢の前の語頭で *o > u* の変化が可能であることを確認していることから、強勢の次の二音節を敏速かつ容易に発声しようとする意識によって、唇と舌の緊張度が高い後舌円唇狭母音 *u* を、強調された母音と連続させないようにしたためと推察される。このことが、イタリア語だけに限られた現象でないことは、英語を例にとって見ても容易に理解される。イタリア語で *-olo* の定着しているものは、英語において母音の消滅が目立つ (例：*angle, article, circle, miracle, vocable, spectacle, obstacle, people, Naples, etc.*) し、ラテン語の *u* を留めているものは、*[u] > [ju]* の変化が普通である (例：*calculus, ridiculous, stimulus, campanula, capsule, loculus, module, etc.*)。

(8). 母音交替の最後として、(4)に対応する *[ʊ], [ɯ], [ɤ]* の前の後舌母音の変化を調べてみることにしよう。この場合、(4)における *e > i* と対応して、標準イタリア語では *o > u* の変化が顕著に見られる (例：*ungere, unto, giungere, giunto, mungere, munto, pungere, punto, pugna, spugna, sugna, unghia, fungo, lungo, giunco, dunque, etc.*)。一方、ミラノ方言では *ũ, õ, ö > o* を保つ傾向が強く現われている。例：*longh 'lungo', ong 'ungere', ongia 'unghia', pont 'punto', fong 'fungo', sponga 'spugna', spong 'pungere', mong 'mungere', gionch 'giunco', scionsgia 'sugna', donca 'dunque', etc.* しかし、これらの *o* には、(5)で触れた *[o]* から *[u]* へ移動する傾向の強いことも考慮に入れておく必要があり、その点から、明確に *[o]* と発音されるものであれば、最後の *gionch, scionsgia, donca* だけに限られてしまうかもしれない。それでも、この *[o]* が、トスカナ南部のアレッツォ (例：*fongo, giognere 'giungere', gionco, longo, montò, ognere 'ungere', ponto, spogna, etc.*) や、コルトーナ (例：*fongo, giogne 'giungere', gionco, logne 'lungo', mogne 'mungere', ognà 'unghia', etc.*)、シエナ (例：*longo, ponto, gionto, gionse, etc.*)、それにまたウンブリアにおいても、*fongo, ognà, onto, longo, mogne,*

⁽²⁰⁾
ponta といった共通の例が確認されている点から考えて、かつては、ミラノ方言にも *o* [o] が定着していたという推察が可能となる。

II. 二重母音

現代イタリア語には、二種類の二重母音が認められるが、常に弱勢の *I*, *U* と他の母音との組み合わせによるものである。

a) 他の母音が先行する場合 (舌は低から高に向う) : *au*, *eu*, *ai*, *ei*, *oi*, *ui*

b) *I*, *U* が先行する場合 (舌は高から低に向う) : *ia*, *ie*, *io*, *iu*, *ua*, *ue*, *ui*, *uo*

これらの中でも、ラテン語からイタリア語への変遷過程において、*ě* > *ei*, *ŏ* > *uo* の二重母音化が最も顕著であるといえる。ここでは、トスカーナが震源地と推察されるこれら二種類の変化を中心に標準イタリア語とミラノ方言の比較、検討を試みる。

(1). 標準語においては、ラテン語の *ě* を起源とする強勢母音 *e* [ɛ] が、前舌狭母音 *i* を先行させて二重母音化する傾向が強い (例: *dieci*, *lieto*, *piede*, *fiero*, *fiele*, *miele*, *vieto*, *lievito*, *dietro*, *pietra*, *diede*, *siede*, *viene*, *tiene*, etc.). これに対して、ミラノ方言では *e* を保って二重母音を拒否する傾向が顕著に現われている。例: *braserà* ‘braciare’, *sciresa* ‘ciliegia’, *dentera* ‘dentiera’, *dedree* ‘dietro’, *fel* ‘fiele’, *fen* ‘fieno’, *fera* ‘fiera’, *lee* ‘lei’, *levaa* ‘lievito’, *manera* ‘maniera’, *mel* ‘miele’, *pè* ‘piede’, *s’cera* ‘schiera’, *sped* ‘spiedo’, *teved* ‘tiepido’, *des* ‘dieci’, etc. この二重母音化の起源を明確に提示することは容易ではないが、北イタリアでないことは一目瞭然である。そして、記録の上からは、トスカーナ (ルッカ、フィレンツェ、シエナ、ピサ) において10世紀~12世紀に確認されている⁽²²⁾。しかしながら、ダンテの『神曲』には、*vene* ‘viene’, *convene* ‘conviene’, *fele* ‘fiele’, *fero* ‘fiero’, *mele* ‘miele’ が、二重母音型と共に併用されているし、また、ペトラルカの『カンツォニエーレ』の場合も、*mele*, *fele*, *fera*, *petre*, *convene* 等が登場している。これに対して、これまでに何度も引用した14世紀のローマ方言の『伝記』では、ローマ (ラツィオ) こそが真の震源地であるかのごとく、まさに二重母音のオン・パレードである。標準語では *e* 型が定着しているものを列記してみると、例: *tiempo*, *potiente*, *pietto*, *vierzo* ‘verso’, *vienti*, *tierzo*, *mieso* ‘mezzo’, *siei* ‘sei’, *ciento*, *parienti*, *copierto*, *miedici*, *castiello*, *maiestro*, *tiesto*, *piezzo*, etc. さらに、この『伝記』の主人公の名前 (Cola di Rienzo) そのものが、標準語における *Lorenzo* > *Renzo* > *Enzo* の縮小変化に対して、*Lorenzo* > *Lorienzo* > *Rienzo* という二重母音型を顕著に示している。確かに、表面的な現象だけを見れば、ローマを中心としたラツィオを、二重母音変化発祥の候補地として提示することも可能である。しかし、これまで確認してきた諸要素、すなわち、音韻面におけるトスカーナ (特にフィレンツェ) の独自性とローマへの影響力を考慮すれば、やはりこの現象は、トスカーナに端を発したもので、その後、ローマにおいてさらに拡大・発展を遂げたと見るのが妥当であろう。

そして、ダンテ、ペトラルカ、それに同時代（ルネサンス初期）の詩人たちの作品に表われた二重母音化を抑制する傾向は、フィレンツェを中心として発展を遂げた詩的文体における、ラテン語音への憧憬、脚韻・音節数に対する異常なまでの執着、といった韻文指向がその原因として考えられるのではないか。もし、この仮説が正しければ、トスカーナの二重母音化の洗礼をミラノは全く受けず、逆にローマは、その洗礼を受け過ぎたということになる。

(2). (1)の場合と同様に、ラテン語の *o* を起源とする強勢母音 *o* [ɔ] は、標準イタリア語では後舌狭母音 *u* を先行させて二重母音化する傾向が強い（例：*uovo*, *nuovo*, *fuoco*, *luogo*, *giuoco*, *cuore*, *muore*, *fuori*, *ruota*, *vuoto*, *vuole*, *suole*, *duole*, *figliuolo*, *lenzuolo*, *cuoio*, *buoi*, *buono*, *tuono*, *uomo*, *muovere*, *cuocere*, *nuocere*, *suocere*, etc.）。これに対して、ミラノ方言の場合、*o* を保つと同時に *o* > *ö* の変化が顕著に現われている。例：*omm* ‘uomo’, *sò* ‘suo’, *tron* ‘tuono’, *bon* ‘buono’, *son* ‘suono’, *söl* ‘suolo’, *fögh* ‘fuoco’, *giögh* ‘giuoco’, *möv* ‘muovere’, *röd* ‘ruota’, *nöf* ‘nuovo’, *lögh* ‘luogo’, *cör* ‘cuore’, *föra* ‘fuori’, *vöd* ‘vuoto’, *vöd* ‘vuoto’, *cös* ‘cuocere’, *cögh* ‘cuoco’, *öv* ‘uovo’, etc. ミラノ方言におけるこの *o* > *ö* の問題を別にすれば、後舌母音における二重母音化 *uo* は、(1)の場合と平行した現象と考えられるため、説明は省略して例だけを列記してみることにする。ダンテの『神曲』における併用（例：*loco*: *luogo*, *foco*: *fuoco*, *omo*: *uomo*, *core*: *cuore*, *cocere*: *cuocere*, *coprire*: *cuoprire*, *fori*: *fuori*, *movere*: *muovere*, *novo*: *nuovo*, *notare*: *nuotare*, *bono*: *buono*, *voto*: *vuoto*, etc.）ペトラルカの『カンツォニエーレ』に見られる二重母音化の抑制（例：*core*, *foco*, *movo*, *novo*, *voto*, *dole* ‘duole’, *fore* ‘fuori’, *po* ‘può’, etc.）や併用（例：*omo*: *uomo*, *loco*: *luogo*, *dolore*: *duolo*, *bono*: *buono*, etc.）そして(1)と同様に、ローマ方言による『伝記』での拡大された現象（例：*muodo*, *Campituoglio*, *Andreuzozzo*, *nuobile*, *puopolo*, *muorto*, *puoi*, *puoco*, *cuorpo*, *uocchio*, *muosso*, *bisuogno*, *vuoglio*, *suonno*, *nostro*, *respuosto*, *puorto*, etc.）

III. $\bar{u} > \ddot{u}$ とケルト基層⁽²⁴⁾

まえがきでも触れたことだが、この現象は、北イタリアの *gallo-italico* と呼ばれる方言（ピエモンテ、リグリア、ロンバルディア、エミリア・ロマーニャの一部、ラディーノ）に共通して確認されるもので、これらの地方の *u* はフランス語やドイツ語の前舌円唇狭母音 [y] の音価を有する。そのために、この現象とケルト基層 (*sostrato celtico*) との関連性をめぐる賛否両論は、19世紀末に端を発してこのかた、現在においてもなお決定的な論証が提示されていない。この章では、ケルト基層の是非を問題にするのは避け、これまで提起された諸要素と対応させながら、ミラノ方言（同時にブリアンツァ方言）に現われた現象だけを検討することにする。

(1) ケルト（ガリア）基語．基語を扱う場合、細心の注意を要することはいうまでもないが、ミラノ方言における *cröi*, *croi*, ‘duro, crudo’ イタリア古語 (*croio* ⁽²⁵⁾ ‘duro’), プロバンス及びカタロニア語 (*croi* ‘crudele’) と共に、ガリア語 (**crōdius* ‘duro’) の推量を可能とし、アイルランド古語 (*crūaid* ‘duro’) や現代アイルランド語 (*cruidh* ‘duro’) との対応が提示されている。⁽²⁶⁾ その他、ブリアンツァの地名には、ケルト（ガリア）基層の影響と考えられるものが数多く確認される。例えば、コモ湖畔のレッコからアッダ川に沿って走る山脈のバッコ山 (*Monte Barro* < *barros* ‘cima’, cfr. ブルトン語 *barr* ⁽²⁷⁾) や、この地方の名称にもなっているブリアンツァ山 (*Monte Brianza* < *briga* ‘monte’), また、ケルト語の接尾辞 (–acum) にいたっては、北イタリアの母音間における子音の有声音化 (–ago < –aco < –acum) が加味された型で、前述の *gallo-italico* 方言の地域には数多く見い出されるが、ブリアンツァ地方は特に顕著である。例: *Imbersago*, *Osnago*, *Bulciago*, *Barzago*, *Dolzago*, *Lurago*, *Capiago*, *Ronago*, *Camnago*, *Cadorago*, *Cucciago*, etc. このケルト語の影響と考えられる地名は、フランスにおいても、南部型 (–ac) と北部型 (–y) ⁽²⁸⁾ で現存している (例: *Aurillac* : *Orly* < *Aureliacum*, *Cadillac* : *Chailly* > *Catiliacum*)。

(2) 基数形容詞．フランス語は、ヨーロッパ諸語のなかにあっては特異な命数法を固持しているが、これがケルト式二十進法の名残りである可能性も十分に考えられる (例: *quatre-vingt-dix* ‘4×20+10=90’, *soixante-douze* ‘60+12=72’)。さて、ミラノ方言では、ほとんど標準語式であるのに対して、ブリアンツァにはフランス式の古い数え方をよく耳にすることがある。以下は標準語: ミラノ方言: ブリアンツァ方言の比較である。

| | | | |
|-----|--------------------|--------------------|-------------------------|
| (例) | <i>millecento</i> | <i>mila e cent</i> | <i>vundescent</i> |
| | <i>sessantotto</i> | <i>sessantotto</i> | <i>sessanta e votto</i> |
| | <i>settantadue</i> | <i>settantaduu</i> | <i>sessanta e dodes</i> |

このことは、ケルト基層云々ということよりも、過去においては、ミラノにもフランス式の数え方が流布していた時期があったのではないか、という推察を提供してくれているといえる。

(3) $\bar{u} < \ddot{u} > i$ の可能性．ケルト（ガリア）語に \ddot{u} [y] の音価が実際に存在していたかどうかは別問題として、中世や近世におけるケルト語には、 $\bar{u} > i$ の変化が確認されている (例: アイルランド古語 *rūn* ‘segreto’ > ウェールズ語 *rhin*, 同じく, *dūn* ‘oppidum’ > *din*, ラテン語 *cūpa* > ウェールズ語 *cib* ‘tazza’, ラテン語 *dūrus* > ブルトン語 *dir* ‘acciaio’, etc.)。 ⁽³⁰⁾ つまり、これらの例から、 $\bar{u} > \ddot{u} > i$ の論証を試みているのであるが、この点に関しては、ミラノ方言とブリアンツァ方言の間に興味深い例が確認される。

| | | | |
|-----|-----------------|-------------|-------------|
| (例) | 標準イタリア語 | ミラノ方言 | ブリアンツァ方言 |
| | <i>arrivare</i> | <i>rivà</i> | <i>rüvà</i> |

| | | |
|-----------|----------|----------|
| bicchiere | biccer | büccer |
| cima | scima | sciümm |
| nuvolo | nivol | nüver |
| piccino | piscinin | püscinin |

しかし、 $\bar{u} > \ddot{u} > i$ を論証する証人としては、この変化はそれほど適格であるとはいえず、それよりも、むしろ、古代ギリシャ語から現代ギリシャ語にかけての Y (イプシロン) の音価の変遷 ($[y] > [i]$) という点から、ブリアンツァへの過去におけるギリシャの影響という課題に発展させた方が意義があるかもしれない。

(4) ブリアンツァにおける $[a] > [\text{æ}]$, $[u] > [ju]$ の変化. ミラノ方言における後舌母音の前舌円唇母音化 ($u > \ddot{u}$, $o > \ddot{o}$) が、 a にも適用されていたことは、ブリアンツァ方言が実証してくれている。

| | | | |
|-----|--------|-------|---------------------|
| (例) | stato | staa | stè (æ) |
| | andato | andaa | andè (æ) |
| | sale | saa | sæ |
| | male | maa | mæ |
| | pane | pan | pæn |
| | cane | can | chæn |

また、ミラノ方言において、強勢母音が語頭に来る場合、よく v を先行させる例を見かける (例: *vun* ‘uno’, *vuna* ‘una’, *vess* ‘essere’, *votto* ‘otto’, *vora* ‘ora’, *volzà* ‘osare’, *vonc* ‘unto’, etc.) のに対して、ブリアンツァでは、*jun* ‘uno’, *juna* ‘una’ を耳にする。これと関連して、ミラノ方言とブリアンツァ方言で強勢の o を比較した場合、後者の方が狭母音化する傾向が強く、 $o[\text{ɔ}] > o > u > \ddot{u}$ の発展も可能となる (例: *do* [dɔ] $>$ *do* $>$ *do* [du] $>$ *dü*)。この傾向は、後舌母音が前舌円唇母音化する場合にも重要な意味を持つもので、ミラノ方言の $o[u]$ や $\ddot{o}[\text{œu}]$ が、ブリアンツァ方言では $o > \ddot{o}$ や $\ddot{o} > \ddot{u}$ に発展することがよくある (例: *tos* [tus] $>$ *tös* ‘ragazzo’, *fior* [fiur] $>$ *fïör* $>$ *fïür* ‘fiore’, etc.)

おわりに

ブリアンツァ方言も導入しながら、ミラノ方言と標準語における母音の諸要素を比較・分析したつもりだが、何分にも、方言に関する報告をするのはこれが最初であり、全く我流に近い論法で筆を進めたのではないかという一抹の不安は隠しきれない。紙面の都合上、子音や形態面からの音韻変化に関しては、次号に譲る結果となり、このことが、全体の輪郭をいっそう不明瞭なものにしたのではないかと反省する。そして、この苦い体験を踏み台として、次号に予定している子音の部を

充実させたい。

《註》

- (1) Cfr. C. Tagliavini, *Le origini delle lingue neolatine*, Bologna 1972, p. 240
- (2) ‘ ’ は標準語の型を示し、その他でも方言的要素はイタリックで示した。また容易に標準語が推量できるものには省略。
- (3) Milano, Como, Lecco を結ぶ三角地帯で、言語的には、ミラノ、コモ、レッコ、ベルガモといった諸方言に包囲されている。
- (4) 語尾における c は [tʃ], 同様に g は [dʒ] の音価を有し、[k], [g] の場合は、-ch, -gh で表記する。
- (5) Cfr. G. Rohlfs, *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti (Fonetica)*, Torino 1966, § 56
- (6) Ibid., § 58
- (7) Meyer-Lübke, *Italienische Grammatik*, Leipzig 1890, § 23
cfr. G. Rohlfs, *op. cit.*, § 55
- (8) Anonimo Romano, *Vita di Cola di Rienzo*, a cura di A. Frugoni, Firenze 1957.
- (9) fidegh < ficatum は典型的な音韻転移 (metatesi) で、ミラノ方言には valmasia < malvasia の例も確認できる。
- (10) [ŋ] は [k], [g] の前の n, [ɲ] は -gn-, [ɲ] は -gli-.
- (11) Bettin da Trezzo, *Letilogia*, 1480
cfr. F. Cherubini, *Vocabolario milanese-italiano*, Milano 1856, V vol. p. 250
- (12) G. Rohlfs, *op. cit.*, § 49
- (13) フィレンツェの西方約17km のアルノ河畔にある町で『神曲』にも出てくる。
cfr. Dante, *Divina Commedia*, Par. XVI 56
- (14) o > u の変化に対して、次の前舌母音 i が、u > ü の発展を刺激したと考えられる。
- (15) 派生語の brodìn, brodòn, brodòs には適用されないのは、アクセントの位置が移動したためであり、この現象は語頭で強勢母音の場合に顕著である。
- (16) Cfr. Dante, *op. cit.*, Inf. XXX 102
- (17) ミラノ方言では、nōf は、‘nove’, ‘nuovo’ を意味する同音異義語を成す。
- (18) G. Rohlfs, *op. cit.*, § 72-73
- (19) Ibid., § 76
- (20) Ibid., § 70
- (21) アポストロフォは、sc [ʃ] と s'c [stʃ] を区別するためのものである。
- (22) G. Rohlfs, *op. cit.*, § 84
- (23) この o > ö の発展過程として、o > uo > üo > üö > ö が提示されているが、e > ie の場合のミラノ方言における拒否の態度から考えて、ミラノ方言に関する限り、o > ö という直接的な変化の方がより可能性が高いと考えられる。
cfr. G. Rohlfs, *op. cit.*, p. 150.
- (24) この問題は、本稿で取り扱えるような課題ではなく、多元性を要求される研究材料である。概略的な展望を知るのには、次の著書が適当と思われる。
cfr. C. Tagliavini, *op. cit.*, pp. 135-137
G. Rohlfs, *op. cit.*, § 35, § 117
- (25) Cfr. (16)
- (26) C. Tagliavini, *op. cit.*, p. 135
- (27) G. Rohlfs, *Studi e ricerche su lingua e dialetti d'Italia*, Firenze 1972, pp. 50-51
- (28) Ibid., pp. 37-38, cfr. C. Tagliavini, *op. cit.*, p. 134
- (29) C. Tagliavini, *op. cit.*, p. 134, 120sgg.
- (30) Ibid., p. 135

Bibliografia

G. Rohlfs, *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti (Fonetica)*, Torino 1966

Ibid., *Studi e ricerche su lingua e dialetti d'Italia*, Firenze 1972
G. Devoto, *Profilo di storia linguistica italiana*, Firenze 1971
Ibid., G. Giacomelli, *I dialetti delle regioni d'Italia*, Firenze 1973
C. Tagliavini, *Le origine delle lingue neolatine*, Bologna 1972

F. Cherubini, *Vocabolario milanese-italiano*, Milano 1856, 6 voll.
C. Arrighi, *Dizionario milanese-italiano*, Milano 1896
G. Siebzechner-Vivanti, *Dizionario della Divina Commedia*, a cura di M. Messina, Milano 1965.

付記（本研究は昭和51年度文部省科学研究助成金による）